様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　1 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～ 2011
課題番号：20520300
研究課題名（和文）仏 16 世紀文学に見る「パン（肉）とワイン（血）」の系譜学（聖体拝領から人肉食へ）
研究課題名（英文）Polemics aroud the Bread and wine in the French Renaissance literrature(from the Eucharist to the Cannibale custom )
研究代表者
平野　隆文（HIRANO TAKAFUMI）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：00286220

研究成果の概要（和文）：フランス・ルネサンス文学に表象された、聖体拝領の全容を解明し、聖餐論の実質から、聖体拝領を巡る暴力まで、ルネサンス期宗教戦争を惹起したテーマを総合的に把握する。その際、ラブレーやロンサール、ドービニエといった一流文学者のみならず、カルヴァン、ベーズ、クレスパンら新教の神学者たちや、ヴェルステガン、セヴェールなどの旧教側の理論家たち、さらには民衆本に至るまで、コーパスを広げて全体像を掴むことに成功した。
研究成果の概要（英文）：
This research has successfully pointed out how the Renaissance French Literature treated the polemic on Eucharist and how it was represented in this area. We have chosen not only the gréât writer like Rabelais, Ronsard ou D’Aubigné, but also the theologians of the two camps (protestant and catholic). The corpus also contains the polemical treaties and the popular pamphlets so that we can grasp the overall aspects of this problem.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2008 年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2009 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2010 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：聖体拝領、聖餐論、神学、フランス・ルネサンス、カンニバル

## １．研究開始当初の背景

フランス・ルネサンス期の暴力表現を巡る研究に従事している中で、聖体拝領とそれに隣接するテーマが、この時期の文学的感受性と神学的理論性を把握し、かつ、内戦に於ける暴力描写の背景を為していたことに着目し、フランス・ルネサンス期の、聖餐論とそれを巡る表象に、多角的な面から光りを当てる必要を感じていた。

## ２．研究の目的

パン（キリストの肉）とワイン（その血）すなわち聖体拝領を巡る理論的側面と、表象的側面の両者を、ジャンル横断的に分析し、ルネサンス文学研究に新たな地平を切り開くことを目的とした。
（１）イエスの受肉と贖罪の絶対的唯一性を主張するプロテスタント神学者たちの主張を整理する。その一方で、カトリック側が、

ミサを突き崩す勢力の背後に悪魔による信仰の無化を感知していた点を、エルヴェ、ロンサールなどの著作の内に探る。
（２）①　クレスパンの『殉教録』は、新教が忌避する『聖人伝』に接近する危険を常に宿していた。この危険を避ける手法を、クレスパンら新教の理論家がどう解決したかを解明する。
②　ヴェルステガン『残酷劇場』の図版と説明および韻文が、プロテスタントの、司祭の腹部に対する異常なまでの執着を示している点に着目し、それがテオファジー（神食）という観点から理解できることを示す。
（３）宗教戦争時の飢餓状態の中で、人肉食を強いられたケースを主としてプロテスタントの側を中心に分析し、それが人類学的視点および神学的視点から、いかなる意味を帯びるのかを探る。
（４）ジャン・ド・レリー、テヴェなどの「旅行記」に描かれた、「新大陸」に於ける人肉食（カンニバリスム）が、聖体拝領の儀式と重なる形で「描出」されている、その根拠を分析し、異文化における内面化の不可能性について考察する。
（５）聖餐論を根拠に内戦で残酷な殺人行為を行うフランスを、病気のメタファーに訴えて断罪するロンサールやモンテーニュの「理性派」と、敵の残虐行為を「天に於ける至福」の観点から、地上の非情を悪魔的大混乱と見なすドービニエら「熱血派」の、相反する二つの感受性について、聖体拝領と暴力の観点から分析を施す。
（６）ラブレーを中心にルネサンス前期の作家たちが表象した、ヘブライ的ワイン（イエスの血肉に加え、カナの婚礼のワインや福音書内に於けるブドウ畑のイメージ）と、ヘレニズム的ワイン（プラトンの『饗宴』のごとく、哲学的議論に向いた精神の高揚を招来するワイン）の幸福な合体が、物語論と神学理論の両方の観点から、新たな相貌を表さないとは限らないので、この観点からも研究を進める必要がある。
（７）①　エルヴェ、セヴェールらカトリック側の神学者たちは、「聖体拝領」（ミサ）に対する攻撃の背後に、キリストの教えを突き崩そうとする悪魔的勢力を感知していたと思われる。その観点から、「キリストの血肉」が、個人および共同体の「再生」に繋がるという意識が見て取れるのか否かを確認せねばならない。
②　また、ロンサールはプロテスタントの姿勢に、「神を無限に遠ざける邪意」を読解していたが、この視点からパンとワインの儀式を把握する必要もある。

３．研究の方法
（１）フランス国立図書館（以下、B.N）での資料収集、特に日本やネット上で入手できないアルスナル図書館のレゼルヴにある文献など（ラエモン、エルヴェ、セヴェール、リシェオムなどの著作家）を、幅広く収集した。民衆本なども同様である。
（２）神学およびルネサンス文学と歴史関連の図書、およびマイクロフィルムを焼き付けた資料を入手し、資料を豊富に揃える基礎作業を最初に行った。
（３）ベーズ、ドービニエ、ベルフォレ、モンテーニュ、「サティール・メニペ」、ラブレー、ボエスチオー『驚異的物語群』、ロセ『悲劇的物語群』など、最近になって優れた校訂版が続々と出版された。それら最新の学術的成果を繁栄した版を、全て揃えるよう努めた。
（４）資料収集と解読作業を怠りなく進めるために、韓国でのルネサンス国際学会や、国内での日本フランス語フランス文学会に於ける発表を積極的に行うよう心がけた。
（５）印刷媒体により、広く一般国民にその成果を知らしめる場を確保すべく努めた。その結果、雑誌『ふらんす』（白水社）で、「エロ・グロ・ルネサンス」という連載を行うことが決定し、既に 2012 年度 4 月号が、2012 年 3 月末に刊行されている。

４．研究成果
（１）カルヴァンからテオドール・ド・ベーズに至るまで、信教側の神学理論家たちは、聖体拝領（特に実体変化論）を、記号学的な不一致、および神性と人性の混同という観点から断罪する。さらには、「パンとワイン」（血と肉）の摂取という行為に、スカトロジックな発想を元とする嘲弄を浴びせること、この発想法が人口に膾炙し、ヨーロッパ中に、「神食」と「人糞」を直結させるジョークを広め、カトリック教徒を貶める最大の武器となった点が了解された。この発想がラブレー『第 4 の書』の「ガステル宗匠」のスカトロジックな逸話と驚くべき相似形を描いている点も明らかになった。これは特筆すべき発見だと思われる。
（２）①クレスパンやグーラールが編纂した『殉教録』は、カトリック的な「殉教伝」に近接するという批判を避けるために、当代の殉教者を、キリスト教初期の殉教者たちと関連づける「歴史的集積法」に訴えた点が、明らかになっている。しかし、カトリックの血の儀式（聖体拝領）を忌避するプロテスタントが、「血の犠牲」を祭り上げることの矛盾を完全にぬぐい去るには至っていないと断言できよう。
②　ヴェルステガン『残酷劇場』に描かれたプロテスタントの腹部切開への執着は、聖体拝領が、凡庸な排泄行為に終わる過程を、ある種の「人体実験」により論証するための拷問である点が重要である。また、この拷問で、

被害者が自分のペニスを食するのを強要されるケースが目立つことも、広義のスカトロジックな蛮行として記憶されねばなるまい。

（３）内戦、特にサンセールの包囲戦で、プロテスタント教徒たちが、飢餓から同僚や子供の肉まで食するおぞましき光景が、ド・レリーやドービニエの描写から明らかになってきた。これは、閉鎖的空間に於いて、自己が自己の一部（子供、親、妻など）を食する、ある種の近親相姦的なカンニバルだと位置づけられる。プロテスタントの、他者との補足性を絶対的に拒む心性が、この種のカンニバリスムを引き起こしたことが、明らかになった。

（４）ド・レリーやテヴェらの旅行記が描く「新大陸のカンニバリスム」は、構成メンバーの誰もが犠牲者の身体の一部を食するという点で、極めて共同体的な性格を帯びている点を強調している。彼らはそこに明らかに、ミサ（聖体拝領）と並行関係に布置されるべき儀式を察知している。ここには、異文化理解には、自文化の知的集積による係数が必ず掛かることが、非常に明快に見て取れる。また、「インド人」が敵の身体を焼いて食することが、彼らをカトリック教徒よりも進んだ文化の持ち主とする視点も導入される。それは、聖体拝領のパンが決して焼かれていない、つまりは「キリストの生肉を摂取している」ことと対比されていると見なしてよい。つまり、したたり落ちる血を食することへの断固たる拒絶が、この感受性には察知できる。

（５）ロンサールやモンテーニュは、超自然の現象を一種の不可知論として棚上げし、聖餐論そのものに深入りしない。むしろ、宗教的な争点の対立が、血みどろの戦争へと発展する自国の悲劇を、メタファーとしての病に冒されているとして表象している。ドービニエは、聖体拝領を断固として排除するが、その背後には、裸体や剥き出しの肉体に対する嫌悪感と忌避感が、根強く横たわっている点が明らかになっている。もちろん、「裸体」の問題は、「新大陸の原住民」の生活形態から引き出され、アダムとイヴの原罪に由来する人間の羞恥心の意識と結びつくため、食する対象としての「肉体」に関係するのでる。

（６）①　ラブレー『第３の書』は、ヘブライ的ワイン（特にカナの婚礼）と、ヘレニズム的ワイン（精神の高揚）の双方を合体させ、その双方がディオゲネスの樽転がしによる、「水からワインを為す」＝「平凡な話題から地味豊かな書物を生み出す」という神学的かつ物語論的に極めて興味深い構造を備えていることが明確になった。

②　さらに、ある種の副産物的な研究成果として、ラブレーの初期作品『ガルガンチュア』の主要なエピソードである「ピクロコル戦争」が、実は、「フーガス売り」（広義のパン）と「ブドウ刈り職人」（ワイン）の諍いに端を発していること、その上、緒戦が「ブドウ畑」に発することなどから、明らかに「パンとワイン」の系譜上に構築された物語であることが明らかになったのは、極めて興味深い。しかも、戦争で大活躍するジャン修道士が、「ワイン畑」を死守するエピソードも、福音主義的な背景を前提に構想されているという仮説が成り立つ。この点は、さらなる考察を要する主題だが、大きな収穫であった。

③　その上、ラブレー作品の随所で、聖体拝領を伴うミサを貶め、「福音主義的な説教」の方が数百倍も有益である、という明示的ないし暗示的な文言が、大きな意味を帯びていることにも気付かされた。これは、聖体拝領の問題系を直接には扱わないラブレーのテクストに、一種の「間テクスト性」と「間神学性」（intertextualité / interthéologicalité）が作用している証拠だと見なしてよいだろう。

（７）①　カトリック神学者の論争文の分析を経て、プロテスタントの象徴論は、キリスト教共同体の紐帯を保証する、「結合の秘蹟」という神聖な教義を根底から崩す悪魔的作用と把握されている点が、確認された。当時の国王（特にフランソワ１世）が、「異端の浄化」という観点から、一時的にではあれ、処刑と贖罪の儀式に重点を置いた理由が、ここから説明できる。

②　ロンサールは、人間と神の「人性」との懸隔を無限に拡張するプロテスタントの主張に、現実的な危険を見て取ったようである。彼に言わせれば、それは、世俗の世界の自律性を確定してしまう力学を招来し、信者および教会に対する神の現前を退ける詐術に堕するという。この思考法は、カルヴァン派に対する激越な攻撃を紡ぎ出す。つまり、プロテスタントは神の身体性の拡散を否定しながら、「主の昇天」を認めているのは、論理的にありえない、という主張へと至る。しかも、「昇天」しうる身体が、天にのみ「幽閉」され、地上に「再降臨」しない、という矛盾をも鋭く突いている。ロンサールの反カルヴァン主義の聖餐論は、以上の議論から明確になったと思われる。

③　付随的だが、決定的に重要なのは、修辞学および文法学的な観点の解明である。「パン」と「ワイン」は、記号であり、その実態は、「記号が向かう対象」である。この両者を徹底的に分断するかしないかで、新教的な立場か旧教の立場かを選択することが決まる、という一点は、修辞学的解釈が本物の戦争の発端になり得る恐ろしさを教示している。また、モンテーニュも断言している通り、「宗教的内乱」は「文法」の問題として把握すべきだ、という冷静な立場にも、今後、さらに分析のメスを入れる必要があろう。

そもそも、「肉体的に」「身体的に」「象徴的に」という語彙の実質性を巡る論争に、どれほどの宗教的実質性が宿っているのかを、本来は議論すべきであった、という後世の反省について、今後も研究を続けるべきであると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）
1）【連載・査読無】平野隆文「エロ・グロ・ルネサンス」、(3)「『エプタメロン』（その 3） － 近親相姦（1）意志の虚偽と快楽の真理」、『ふらんす』、白水社、2012 年 6 月号 pp. 5-6（2 段組 2 ページ）
2)【連載・査読無】平野隆文「エロ・グロ・ルネサンス」、(2)「『エプタメロン』（その 2） － 洪水の山中の神学的解剖学」、『ふらんす』、白水社、2012 年 5 月号 pp. 58-59（2 段組 2 ページ）
3)【連載・査読無】平野隆文「エロ・グロ・ルネサンス」、(1)「『エプタメロン』（その 1） － エロ・グロ・ナンセンスの神学的解析」、『ふらんす』、白水社、2012 年 4 月号 pp. 90-91（2 段組 2 ページ）
4)【査読有】平野隆文、「ラブレー作品に見る暴力の非暴力性は何に由来するのか？ －『ガルガンチュア』のピクロコル戦争」と『パンタグリュエル』の第 14 章を中心に－」、『立教フランス文学』第 41 号、2011 年 3 月、pp. 51-64.
5)【査読無】Takafumi HIRANO,《 Pourquoi et comment enseigner la littérature renaissante française au Japon ？》, in *Etudes de langue et littérature française en Asie du Nord-Est pour le XXIème siècle ：Enjeux et perspectives,* Université Korea, Séoul, pp. 29-38, 2010.
6)【査読有】平野隆文、「ルネサンス文学に見る暴力の表象 ： 暴力・福音・聖体・カンニバリスム －『暴力の福音化』から『福音の暴力化』へ －(1) 『エプタメロン』を中心に」、『立教フランス文学』第 39 号、2010 年 3 月、pp.39-68.

〔学会発表〕（計　5 件）
1)【招待講演（学会ワークショップ）】平野隆文「フランス・ルネサンス文学に見る暴力の表象とその周辺」日本フランス語フランス文学会 2011 年度秋季大会、（小樽商科大学）、（久保田剛史、濱田明と共同）、2011 年 10 月 9 日.
2)【招待講演（ラブレーモンテーニュ・フォーラム）】平野隆文、「『エプタメロン』に見る性・暴力・神学」、日本フランス語フランス文学会 2010 年度春期大会（早稲田大学）、2010 年 5 月 30 日.
3)【招待講演（学会ワークショップ）】平野隆文、「メランコリーの地平」、日本フランス語フランス文学会 2008 年度春季大会(露崎俊和、岡田温司、須藤訓任、瀬戸直彦と共同)、青山学院大学、2008 年 5 月 24 日.

６．研究組織
(1)研究代表者
平野　隆文（HIRANO TAKAFUMI）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：00286220

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし